

「伸長期から充実期へ 授業実践力のさらなる向上」

～主体的・対話的で深い学びを実現する国語科の授業づくりを通して～

研究代表者：須佐宏（和歌山大学教職大学院）

共同研究者：福永徹・南方美紀・舟尾功・岩崎朝蔵（和歌山市教育委員会）、川端大奨（和歌山大学教育学部附属小学校）、高岡美奈（泉南市立一丘小学校）、田村竜士（和歌山市立伏虎義務教育学校）、米田優介・松間啓介（和歌山市立四箇郷小学校）、河崎泰士・小栗幸樹（和歌山市立太田小学校）、北山友梨・岩本陽介（和歌山市立新南小学校）、宇治田乃（和歌山市立三田小学校）、木下信司（和歌山市立和佐小学校）、田中康博（和歌山市立高松小学校）、岡崎夕貴・熱川千寿・上西隆夫・原見康司・森脇拓也・楠本真弓（和歌山大学教職大学院生）

1. 研究の趣旨

文部科学省が令和3年3月25日に公表した「令和元年度学校教員統計調査」¹⁾の公立小学校における教員の年齢構成（図1）によると、43歳を底に、その前後5歳の教員数が少なくなっており、小学校の現場において、教職経験20年前後の中堅からベテランへと移行していくあたりの教員層が薄く、教員の年齢構成の不均衡が多く为学校で生じていることが予測できる。筆者が小学校の新規採用教員として教壇に立ったのは、今から30年前になるが、図1では「49歳」に当たる。グラフからもわかるように、当時は自身よりも年輩の層に厚みがあり、身近にいる先輩から多くのことを学ばせてい

公立小学校（令和元年度）

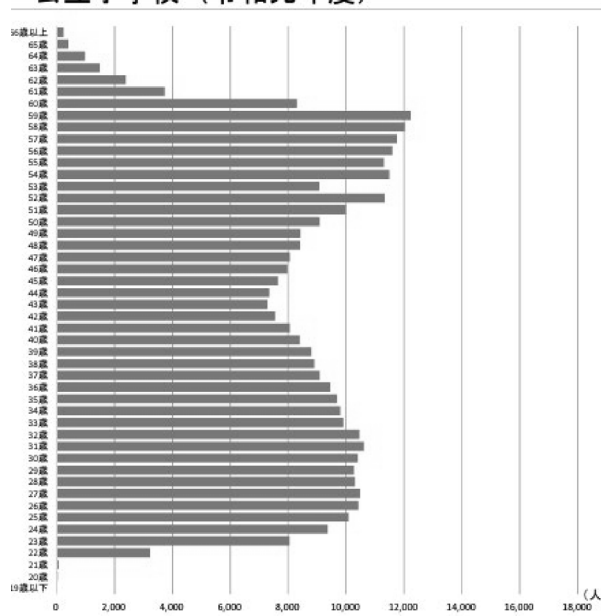


図1 公立小学校 教員の年齢構成

ただくことができた。また、自身の後にもそれほど多くの後輩が入ってくることもないため、新規採用から10年近くは「若手」で居続けることができた。しかし、現在、中堅と呼ばれる層（グラフでは31歳をピークにした前後5歳あたり）の教員が新規に採用された当時、近しい先輩が十分におらず、加えて、自身の後に新たに入ってくる教員が多かったため、「若手」で居られる期間が短かったことが推測される。そう考えると、彼らは「早くして『若手』ではなくなり、『先輩面』をしなくてはならなくなった世代」と位置付けることができる。

本研究では、そんな「中堅教員」にターゲットを絞り、一定の実践経験を有する同年代のみで構成する共同研究グループを構成し、成長に停滞をきたしていたり、目標が見えにくくなってしまっていたり、また、ともすれば、自校では背伸びした姿を演じなければならない

ために自己の学びに対する意識が弱まってきていたりするかもしれない教員同士が、互いにできるだけ多くの授業実践を交流することによって学び合うことで、自己の授業実践力のさらなる向上を目指す機会とすることを目的に行ったものである。

2. 研究の経過

上記「中堅と呼ばれる層」にあたる13名に、和歌山市教育委員会の指導主事4名、および和歌山大学教職大学院で学ぶ現職の院生5名、および須佐の計23名を研究メンバーとするグループを作り、相互参観を実施した。ただし、働き方改革が叫ばれる昨今であることを考慮し、授業者としての授業公開はマストではなく、「希望制」とし、参観も自校の業務に支障ない範囲で、「可能な限り参加する」という申し合わせをしてスタートした。

授業者及び教材等の詳細は次のとおりである。原則として、授業日の放課後、児童帰宅後に参観者で授業カンファレンスを行った。

【第1回相互参観授業】令和4年9月8日（金）6限

学校名：和歌山大学教育学部附属小学校 授業者：川端大奨教諭

教材名：主教材「ごんぎつね」（光村図書）「国語 四下 はばたき」

単元名：「ごんぎつねはかなしい作品？ うれしい作品」 参加者：11名

【第2回相互参観授業】令和4年9月28日（木）5限

学校名：和歌山市立新南小学校 授業者：岩本陽介教諭

教材名：主教材「いろいろな ふね」（東京書籍）「新しい国語 一下」

単元名：「のりモン GO」～のりたい のりモン カードで紹介～ 参加者：12名

【第3回相互参観授業】令和4年10月13日（金）5限

学校名：和歌山市立高松小学校 授業者：田中康博教諭

教材名：主教材「海のいのち」（東京書籍）「新しい国語 六」

単元名：「海がくれたメッセージ～心に残った生き方を紹介しよう～」 参加者：4名

【第4回相互参観授業】令和4年10月20日（金）6限

学校名：和歌山大学教育学部附属小学校 授業者：川端大奨教諭

教材名：主教材「世界にほこる和紙」（光村図書）「国語 四下 はばたき」

単元名：「世界にほこる”和“歌山」（1） 参加者：7名

【第5回相互参観授業】令和4年10月28日（土）2限

学校名：和歌山大学教育学部附属小学校 授業者：川端大奨教諭

教材名：主教材「世界にほこる和紙」（光村図書）「国語 四下 はばたき」

単元名：「世界にほこる”和“歌山」（2） 参加者：7名

【第6回相互参観授業】令和4年11月2日（木）5限

学校名：和歌山市立四箇郷小学校 授業者：松間啓介教諭

教材名：主教材「モチモチの木」（東京書籍）「新しい国語 三下」

単元名：「豆太の果てまでイッテP～5さいの豆太を知る旅～」 参加者：11名

【第7回相互参観授業】令和4年11月2日（木）6限

学校名：和歌山市立四箇郷小学校 授業者：米田優介教諭

教材名：主教材「大造じいさんとがん」（東京書籍）「新しい国語 五下」

単元名：「狩りの舞台は教室へ」

～「大造日記」に大造じいさんの心の中を打ち明けよう～ 参加者：11名

【第8回相互参観授業】令和4年11月11日（土）1限

学校名：和歌山市立伏虎義務教育学校 授業者：田村竜士教諭

教材名：主教材「モチモチの木」（東京書籍）「新しい国語 三下」

単元名：「三年一組ブックトーク」で“オシノコ”決定！ 参加者：14名

上記のとおり、相互参観授業の実施は計8回、のべ参観者数は77名であった。次章の実践例では、紙面の都合、最も多くの授業公開を行った附属小学校の川端大奨教諭の実践のうち、「第5回」を中心に、それまでの学びを活かした単元構想や授業における子供の姿、学び等について、授業者の振り返りにより詳述する。

3. 実践例（川端大奨教諭の振り返りより）

3. 1 プレ公開授業について

本研究へ参加するにあたり、同世代の教員仲間と共に学び合えるという嬉しさがある反面、自身の実践力に対する不安も少なからずあった。そのため、9月8日の「第1回」公開授業の前に、プレ公開授業として、1学期にも公開授業を行い、すでに本研究への参加を表明してくださっていた先生方に参観いただく機会を得ることができた。プレ公開授業では、説明文「アップとルーズで伝える」を扱った。単元としては、主教材を読み、そこで学んだことをもとに、「学校のルールについての自分の考え」を相手に伝えるための文章を書くというものであった。本時の授業は、各段落の内容を捉え、各段落のつながりを考えるというものであったが、子供と授業者との一対一対応の授業となってしまった。その結果、集中力を切らしてしまう子供が多くなり、その対応をしようと授業者も言葉かけが多くなり、子供より授業者が、多く話してしまうという形になってしまった。授業後のカンファレンスにおいて、参観いただいた先生方から「先生の反応が早すぎるのではないか。」「教師からの知識の押し付けにならないように、言葉数を減らしたい。」「子供同士がつながるようするためには、子供同士がまず聴き合えるようにしたい。」また、「子供が学びたくなるしかけや掲示、問いが必要ではないか。」などの意見をいただいた。

単元構想を振り返ってみると、子供たちに身に付けてほしい力に意識がいくあまり、授業者本位の構想になってしまっていた。そのため、子供たちの学習者としての当事者意識が弱く、集中力の持続が難しかった。そのような状況では、どうしても授業者が話すことが多くなり、結果、子供たちが話し合う時間が少ない、授業者からの一方的な授業展開となってしまった。

3. 2 プレ公開授業からの学びと第5回公開授業実践（主教材「世界にほこる和紙」）について

プレ公開授業を含むこれまでのカンファレンスを通じた学びから、本単元では子供たちにとって意味のある学びを引き出すため、単元構想から子供たちの学びの筋に沿ったものにしていかないといけないと実感していた。そして、子供同士での聞き合いや話し合いをしていかないと子供の学びにならずに教師側の押し付けになってしまうことも強く意識するようになった。そうでなければ、子供が知識・技能を習得するためだけのものになり、子供たちにとって本当の意味ある学びにならないのだと気付くことができた。

そこで、今回の実践では、まず、子供たちに学習の目的意識を持たせる工夫が必要だと考えた。それは、説明文を読んで、ただ要約しましょうというような学習課題にすると子供たちは目的意識を持たないまま学習へと向かい、受け身の学習になってしまうからである。

本学級では、総合的な時間の学習で和歌山県の魅力をPRするという学習を進めている。これは和歌山県が抱えている地域課題の解決をするものであり、子供たちは自分たちの住む県について意欲をもって学習に取り組んでいる。特に調べたものや体験したこと等については、我が事のように捉えており、それを誰かに伝えたいという想いを持っている。そこで、総合的な学習の時間と国語科の学習をつなげて課題設定を行うことで、子供たちは、目的意識を持ち、さらに意欲的に学習に取り組むと考えた。また、言語活動のしかけも子供たちが楽しい、やってみたいと思えるものに工夫した。本実践では、和紙新聞の記事を書くために要約することを言語活動とした。そして、その次に和紙新聞の知識・経験を活かして、和歌山の魅力新聞を作る言語活動へと繋がっていくという単元構想にした。

実際の授業では、子供たちは、和紙新聞を作る必要性を実感しており、この実践の知識と経験が次の学習に生きてくることを見通しており、常に意欲的に学習に取り組む姿が見えた。また授業者としても授業者が話しすぎずに子供同士でつないで話し合いをして学びを深める授業形式を意識して取り組んでおり、この実践では意識して授業者は出ずに子供の話し合いを聞くことに徹した。その結果、子供同士が言葉をつなぎ合う話し合いを経て、学びに自分たちで向かう姿が見られた。

本実践のカンファレンスでは、「単元構想が子供にとって意味のあるものになっている」「授業者が出ないことで子供同士のつながりがよく見られた」といった意見をいただくことができた。

3. 3 これまでの実践を振り返って

上記実践とこれまでの自身の実践を比較すると授業者としての意識に大きな変化があったと感じている。これまでは、授業者自身の学級経営の甘さや単元構想力の弱さがあった。自身の参観だけでなく、他の実践者の授業を参観し、カンファレンスに参加することによって、まずは、子供をしっかりと見取ることが必要だと気付くことができた。そして、その上で、子供にとって学ぶ意味のある単元を構想するために、「学びたい」、「面白そう」と思わせる工夫が必要だと実感し、教科をこえたつながりを意識した単元を構想するという手法

を取ることにした。その結果、本單元では、子供たちが意欲的に学習に向かう姿を多くみることができた。それは、教科と教科をつなぐことで、子供が学習する意味や見通しを持てたことが大きな要因であったと感じている。授業者自身、これまでも、学級経営力を含む授業実践力を身につけ、單元構想の弱さを克服して、子供たちが楽しいと思える授業づくりをしたいと常に思っていたが、うまくできずにいた。今回の研究に参加し、カンファレンスでいただいた助言や意見をもとに日々の授業の意識や單元構想を一から考え直し、授業スタイルを一新することに舵をきることができた。そのことは、今回の授業における子供たちの様子の変化に何よりも表れていると考える。今後もより一層子供たちが楽しいと思える授業づくりに邁進していきたい。

4. 共同研究者相互の学びより

本研究に参加した研究メンバーには、相互参観やカンファレンスを通して、特に自身の学びにつながったと感じることについて各自記述してもらった。その結果、次のような傾向が見られた。

最も多くのメンバーが指摘したのは、子供たちが「やってみたい」「面白そう」と思えるような單元、子供にとって学ぶ必然性のある、自然な文脈による学習單元にするために、子供と教材との出会いとなる「第0次」を大事にすることや「教師として学ばせたいこと」と「児童が学びたいこと」とのバランスを考えて單元を構想するということであった。今回の授業実践者の多くが、子供たちにとって魅力ある單元を構想しており、生き生きと学ぶ子供の姿を目の当たりにして、自身もこのような單元を組んで子供たちと授業をしたいと感じることが多かったためではないかと思われる。

次いで、指摘の多かった項目は2つあった。一つは、子供同士が意見を繋ぎながら話し合えるようにするための「教師の出」と「教師の引き」についてであった。もう一つは、「児童と共に作る、児童のための、国語科授業の板書」についてであった。前者は、川端教諭も実践の振り返りの中で触れているように、小学校教員にとっては、理想とするところであり、それは、聴き合える子供たちの学習文化を構築するための学級経営力と大きく関係してくる部分でもある。聴き合い、学び合う学習文化を醸成し、教師自身の出番を控えることにより、子供たち自身が繋がり、学びを構築していく中で、思考の流れを見きわめながら、適切な支援の言葉を厳選して投げかけていくことができれば、学びの成果は大きくなる。それができるのは、子供たちの学びのプロセスをみとることのできる先生ということになるだろう。後者も、国語科の授業で多くの授業者が直面する課題であると言える。ある研究参加者は、第7回の相互参観授業で見た米田教諭の板書に触れ、「児童の学びの支援になるような板書とはどんなものなのかについて考えるきっかけとなった」と振り返り、「米田先生は、スツキリと言葉を精選した板書に仕上げられました。着目すべき言葉が明確となり、学習を振り返る際、児童が思考する手立てとなっていました。」と記述しており、板書が児童の思考を促す支援ツールとなっていなければならないのだということに気づいており、今

後の自身の板書に好影響を及ぼしていくことが期待できる。他にも「めあての言葉の厳選」や「指導事項の系統性や授業者として指導事項を明確に意識することの大切さ」、「音読という学習支援のあり方」も複数名が指摘していた。

5. 成果と課題

本研究の成果と課題については、次のように考えている。

成果としては、次の2点が挙げられる。

一つ目は、川端教諭も自身の授業実践力の変化を実感して述べているように、参加した多くの共同研究者が、相互参観後のカンファレンスで忌憚のない感想や意見を述べあうことで、自分自身の実践を振り返り、積極的に取り入れて実践し、自身の授業実践の変革へと繋げていることである。

もう一つは、当初3～4時間参観できればよしとしなければいけないだろうと思っていた相互参観の授業者が6名も手を挙げてくれ、同世代のライバルとも言える「ある程度授業実践力を持ったもの同士」で8時間もの授業を相互参観できたことである。何よりも主体的に手を挙げて授業を公開してくれた6名の先生と他校からの参観者の受け入れと他校への参観訪問を快諾してくださった各校の校長先生に感謝したい。

課題としては、次のことを挙げておきたい。それは、「音読という学習支援のあり方」についてである。振り返りの中でも何人かが指摘しており、次のような振り返りもあった。「一番の学びは、『音読』です。子供が発言し、教科書の本文から根拠を説明した後、教師が『みんなで読んでみよう』と音読させる場面がありました。音読させることで、子供たちの思考も視線も本文に戻させていました。また、全ての子供の発言の度に音読をさせるのではなく、物語の本質に迫る文章や、指導内容に関わる文章が根拠になっている発言のときにのみ音読を挟むことによって、リズムが良く、子供達の思考が深まる授業を展開していました。子供の思考を深めるために音読を有効活用するためには、教師が物語の本質を捉え、どの文章にそれが表れているのかを明確にするための教材研究と、子供の思考の流れや表現力の癖を把握しておくための児童理解が必要だということも分かりました。今後、国語科の教材研究を進める中で、『どの文章を音読させるか』という視点を磨いていきたいと思います。」このような授業場面は確かにあった。しかし、今回参観した授業の中では、そういう学習場面は決して多かったとは言えない。大切さは分かっている、それを日々の実践のなかでしていくことはなかなか難しいことである。研究メンバー諸氏には、その部分をぜひ今後の実践の中で強く意識をして授業実践を行い、各授業教室でそれが「当たり前」となった暁には、音読による指導効果を検証する研究にも着手してみたいと思う。諸氏の教育実践の益々の充実を期待して今後も伴走を続けていきたい。

ⁱ https://www.mext.go.jp/content/20210324-mxt_chousa01-000011646_1.pdf

「令和元年度学校教員統計調査」文部科学省（令和3年3月25日公表）